

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報

第8号



事務局：東京学芸大学心理学研究室内 〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL&FAX. 0423-27-2890



脳の可塑性とLD

東北大学教授

永 淵 正 昭

最近、我が国でも学習障害に対する関心が高まり、LD研究会が発足して2年を経過したが、研究発表や地域での活動も少しずつ充実していることは、私のみでなく皆の認めるところである。今年で3年目になるが、今回から学会として装いを新たにすることになっている。

ところで、医学の面では画像診断や脳波技術の進歩で、脳の病態や機能がより鮮明になってきつつある。そこで従来は、LDを微細脳損傷という名称で一括されてきたが、今後は脳の病変をまず明らかにしてから、教育に委ねられることになり、医学と教育の連携が一層緊密になってくる。

ここでケースを紹介したい。まず、幼児期に対人障害と言語発達遅滞のため自閉症と考えられていた男児(4歳)が、脳のCT検査で左側頭葉に腫瘤のあることがわかり、その除去手術を受けた後、自閉的傾向が改善してきた。次に、脳腫瘍のため左前頭葉を大きく切除された女兒(10歳)であるが、手術の後、多少、注意散漫になっただけで、言語障害もなく学業成績は術前とあまり変わっていない。

また、乳児期から徐々に進行した水頭症で、CTでは脳の実質が頭蓋骨の内壁に薄く張り付いているような状態でありながら、日常生活に支障のない大人がいる。

一方、学習障害と言われる子供の脳を検査しても、異常はなかなか発見できない場合がある。特殊教育を受けている女兒(12歳)で、漫才調の話し方と歌唱に優れているが、読み書きはひらがなだけで、それもよく誤り、算数も苦手なケースがいる。

このようなケースをみていると、脳の可塑性という可能性の大きさに驚かされると同時に、非常に微細な変化が知的活動の大きな支障になっていることを改めて認識させられる。学習障害というのは脳の高次機能の一部が十分に発揮されない状態と考えてよい。そこで、この原因を突き止めるとともに、この高次機能をいかにして引き出すかが我々に与えられた課題であろう。学会と名称が変わるのを機会に、「本学会は脳力を引き出すために、我々が学習する場である」と心得たい。